
我は誓う、剣に友に

十海 with いーぐる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我は誓う、剣に友に

【Nコード】

N8543Z

【作者名】

十海 with いーぐる

【あらすじ】

人間族の若者グレンは幼い頃、崩れた崖で錆びた剣を手に入れた。^{ザハール}初めて見るはずなのに、何故だかひどく懐かしく、いつも背中背負って大事に持ち歩いた。月日が流れ、一人前の鍛冶職人に成長したグレンは自らの手で剣を鍛え直す。のみならず、己の剣に名を与え、魂を分かつ『絆の誓い』の儀式を行おうとしていた。時を同じくして闇の中、平和な村を屍闇に染めようと、不気味に蠢く影が迫りつつあった……これは、英雄の魂を宿した『普通に生きる』人々の物語。 本作は、新紀元社より刊行されたTRPG「バルナ・

クロナカ」及びサプリメント「ナジャ・イストリカ」（著：小林正親）の世界観とシステムをベースに作成しました。登場するキャラクターは、いずれもバルナ・クロナカのルールに基づき作成したものです。世界の成り立ちや神話、仕組みなどは作中できちんと説明し、元となったTRPGをご存知ない方でも、普通にファンタジー小説としてお楽しみいただけるよう心を砕きました。色褪せた大地を踏みしめて、鮮やかに今を『生きる』人々の織りなす、骨太な物語をご賞味ください。

序章（前書き）

・ 作中におけるルールの解釈、適用はあくまで個人の解釈によるものです。

・ くれぐれもこの件について、新紀元社および著作者の小林さんに問い合わせる事はお控えください。

序章

遙かな昔。

虚空を渡る始祖たる風が、想いえがいて形をつくり、六柱の聖霊が生まれた。

聖霊たちもまた想い、えがいて形をつくり、ルラーラ現界とそこに住まう命を創った。

しかし。

現界の住民は自らの守護者たる光の聖霊に反旗を翻し、それ故光の聖霊は悲しみとともに彼らを光の槍で貫いた。

この時から現界には、心魂の欠けた四つの種族と何も失わなかった一つの種族、そして屍闇の王が存在する事となる。

賢明さを失った戦人族^{ドゥオルグ}。

希望を失った長命族^{エルフィン}。

オウガ・アザレラ
鬼面族は生まれながら愛を知らず、勇気を失った笛小人族^{ココスリ}は自らの影をも恐れて逃げ惑う。

だが唯一、人間族^{ザハール}だけは何も失わず、故に他の種族から嫉まれる運命となる。

ザハールが失ったのは、『信頼』と言う絆なのかも知れない。

ナジャ
希望の灯火。

遠い昔、生きとして生ける者全てを屍闇の王から守るため、自ら輪舞に身を投じた勇氣ある者たち。この世に屍闇の王が再臨した時、彼らもまた、生まれ変わる。

その身に光の聖霊より授かりし証??^{シエン} 刻印を抱いて。

彼らの中には、自らが信じ、命を預ける己の武器に名を付け、永遠の絆を誓った者たちがいる。剣、斧、弓、あるいは槍、そして盾絆を誓い、武器の内に眠る心魂バルナを呼び覚ました者たちは誓いジエンギレし者と呼ばれた。

誓いし者を失った時、心魂目覚めし武器は眠りにつき、ただのモノに戻ると言う。

眠れる武器と転生の英雄。

もしも、再び彼らが出会ったら？

最後の屍闇の王の出現より既に1200年。

不屍の魔物と妖鬼の恐怖は記憶の底に沈み、希望の灯火の存在もおとぎ話に名残を留めるのみとなった今……。

答えを知る者は、まだいない。

【1】夜に走る

男が走っていた。

まだ夜も明け切らぬ荒野を、葉っぱの尖ったの、丸いの、蔓巻くの……腰の高さまで伸び茂った、堅い草をかき分けて。亜麻色の髪は汗に濡れて額にへばりつき、うっすら無精ヒゲに覆われた口元は引きつった笑みの形に固まっている。

男は必死で走っていた。

夜露に湿った草がまとわりつき、今にももつれそうな足を更に鈍らせる。必死で走っているのに、なかなか体が前に進まない。さながら、寝苦しい夜の悪い夢。

だが、現実だ。

皮膚を伝う冷たい汗の玉も。ぜいぜいと耳奥で轟く息の音も。渴いて張り付く咽の奥、冷えた息は胸の奥に刺さり痛む。そして……腕の中で暴れる小さな生き物一人。

「イーーーーーヤアアアアア！」

白目のほとんどないすみれ色の瞳、兎を思わせる鼻面の尖った愛くるしい顔。長く編み垂らしたトウモロコシ色のお下げが、ぶんぶんぶんと派手に揺れる。

「落ち着け、落ち着けつつのネイネイ、こら、暴れるなっ」

「イーーーーーヤアアアアア！ 怖い、怖い、怖いーっ」

「^{フルクン}笛小人族の娘は完全に取り乱していた。普段からは信じられないような力で暴れ、手足を突っ張る。」

予測不能の動きでびくん、びくんと強烈に揺さぶられ、ちよつとでも気を抜いたら最後、手からすぽんつと飛び出しそうだ。それはすなわち、今の状況下では彼女の死を意味する。

横ざまに揺さぶる動きは自ずと前に進む妨げとなり、走る速度を鈍らせる。

元々腕力に自信のある方ではない。加えて、四十路を超えた身にはきつい仕事だ。一足前に蹴り出すことに体の節々がきしみ、骨が、肉が悲鳴を挙げる。

「ちくしょう、このままじゃあつ」

ぞ、ぞぞ、ぞあ……。

生ぬるい風が吹き抜け、腐肉の匂いが一段と濃くなった。

来る。草をかき分け、追っ手が迫ってくる。息も乱さず、着実にこちらら生身の人間だが、あいにくと向こうは切れる息も、痛む心臓も持ち合わせちゃいないと来てる。初手から分の悪い追いかけっこ。だが、降りるつもりはさらさらない。

それでも苦し紛れに悪態の一つ二つは吐きたくもなる。

「あー、もう。何で俺、こんなことしてるんだろつなあ……」

ほんの数時間前、男は雪姫川を下る川船に乗っていた。

【2】川を下りて

エルプリンツェザ・イバイ
雪姫川のほとりの色合いは、幅10ルット(30m)ほどの水を挟んで南と北で、すばつと二つに分かれている。

南岸は幾本もの水路が引かれ、拓かれ、耕され、ふっさりと伸びた麦と稲が穂を揺らす。風が吹くたびにさやさや、ざあつとしなやかな、青い波が走り抜ける

片や北岸には人の手はほとんど入っておらず、カンタアリ・ガイラ残歌の戦い以来の手付かずの荒れ地が広がっている。茫々と生え広がる丈の高い草と絡み合う木々の枝葉が褪せた緑の壁となり、水際近くまで押し寄せていた。

この地の開拓が始まって40余年、村も人も増えた。しかしながら、エマン・エルム大荒野は依然として人が生きるのに容易い土地ではないのだ。

船が下るにつれて、川岸に刻まれた人の痕跡は徐々に濃くなり密になり、草を食む牛の姿がぼつぼつと増え始める。

ほどなく、行く手にアンヘイルダールの『北の見張り塔』が見えてきた。

ここを越えれば、もう村の中だ。

川舟の乗客たちが荷物をまとめ、降りる支度を始める。男は船底に置いたふた付きの籠を持ち上げ、ベルトを肩にかけた。

一抱えほどもある大きな四角い籠の中には、川上の山で採取した薬草が詰まっていた。

「よつこらせつと」

たかだか草と言えども、集まればけつこつな重さになる。思わず

知らずもらした掛け声に、我ながら年よりくさいと苦笑がにじむ。重ねた歳月に嘘は着けぬ。四十の坂を越えた頃から何かにつけ、がくつと段差を踏み抜いたような、体力の衰えを感じていた。

(こつして、季節ごとに薬草採りに出てこられるのも、あと何年かね……)

ゆらありと船が揺れる。決して激しくはなく、あくまでゆるやかな動きで。

流れが変わったのだ。

船は雪姫川と薄雪川エルル・ウガルテの合流点にさし掛かりつあった。

ふさふさと黒いヒゲを蓄えた船長は、巧みに流れを読み、舵を取り、船を棧橋へと寄せて行く。

程なくこつん、と木と木が触れ合い、振動が足下に伝わって来た。すかさず舳い綱が投げられる。待ちかまえた船着き場の人足が受け取り、杭へとくくり付けた。

渡し板なんて気の利いたものはここでは使わない。船べりを乗り越え、すたん、と棧橋へと降り立った。亜麻色の柔らかな髪が揺れる。すたすたと歩いて棧橋を渡り、岸へと向かう。ぐずぐずしていたら、荷下ろし荷積みの邪魔になる。

「つしよつと……」

どっしりと動かない大地を踏みしめ、男は大きくのびをした。体中の骨がぼきぼきと、小気味の良い音を立ててほぐれて行く。

彼は体の大きな……所謂、偉丈夫ではなかった。背は小さく、手足胸板足腰の肉付きは、がっちりと言うよりむしろ、むっちり。外見の語る通り腕っ節もさほど強くはない。

二重瞼のぱつちりした目元、顔にはほとんど皺らしい皺はなく、肌もつるりと滑らかで、顎を覆う無精ヒゲさえなければ少年と言っても通じるだろう。

だが、愛想笑いを絶やさぬ口元とは裏腹に、蜂蜜色の瞳は終始油断なく辺りを見回し、内側に宿る光は鋭い。

身のこなしは猫のようにしなやかで、それなりの場数を踏んで生き抜いて来たことを伺わせた。

この男、名をハーティアル・ジェムルと言う。通り名はハーツ、小さいながらも、サガルロンドの裏通りに店を構える薬草師だった。

エルルタンタからの帰り道、彼がわざわざ遠回りしてこのアンヘイルダールの村に立ち寄ったのには、理由があった。

一つはここがめっぼう食い物の美味しい村であること。そしてもう一つは……。

「さあて、久しぶりにグレンの坊ンの顔でも拝みに行くかね？」

誰にともなくつぶやく刹那。懐の奥深くしまい込んだ小袋が、微かにしゃり……と鳴った。

【3】大鍋亭にて

船着き場を出て東に歩き、円形の広場へとさしかかる。

ここは南の門からの道と、船着き場からの道の出会う場所。村で一番、賑やかな界限だ。

新鮮なバターをたつぷり乗せた蒸かしイモ、あぶった腸詰め、丸パン添え、魚のフライと揚げたイモ。所狭しと軒を連ねる屋台の前を通り過ぎ、まっすぐに『大鍋亭』へと入る。

ここはアンヘイルダールの唯一の居酒屋兼宿屋。ハーツが村を訪れる際の定宿であり、相棒との待ち合わせ場所だった。

『まずは鍋より始めよ』

店に入ると真つ先に、暖炉の上の壁に刻まれた碑文が目に入る。その言葉通り、奥の厨房では特別あつらえの巨大な鉄鍋がくつくと湯気を立てていた。

既に5の鐘が鳴り終わり、昼食の混雑は徐々に収まりつつある。だが、それでも店が賑わっていることに変わりはない。

空気がうねっていた。

人間、^{ザハール}ドヴォルグ、エルフィン。体中くまなく衣服で覆い隠し、決して帽子を脱がない、仮面の奴ら……^{オウガ・アザレラ}鬼面族。

それぞれが喋る言葉が異なる響きを奏で、ミツバチの羽音のさながらにわぁんと飛び交っている。

種族、性別、年齢。あらゆる色が入り交じり、使いさしの絵の具皿みたいな客席を見回していると……。

「お？」

カウンターの向こうから、とんがり帽子が近づいて来る。えっちらおっちら左右に揺れる帽子は、賑やかな幾何学模様で彩られていた。

「んっしょ、んっしょ……」

木の転る音がする。どうやら、帽子の主は踏み台を上っているようだ。ほどなく、先端に毛房の生えた長い耳が。次いで鼻柱の低いとがった顔が、ひょこつとのぞいた。

トウモロコシ色の長いお下げ髪が揺れる。

「おまちどおつ、『今日の煮込み』と揚げパンの定食、あがったよー！」

「よっ、ネイネイ」

カウンターに歩み寄り、軽く手を掲げてご挨拶。

白目のほとんどない、愛くるしいスミレ色の瞳がこちらを見る。途端に、兔めいた顔に、ぱあつと極上の笑顔が花開く。

「おじさんっ、おじさんっ、薬草屋のおじさんっ！」

「元気そうだな」

「うん、すつごく元気！ 何食べる？ 今日も美味しいよ！」

「そーかそーか。修業がんばってるんだな！ 定食一つ頼むわ」

「りょーかい、定食一つねっ」

「それと……赤毛の鍛冶屋が来てると思うんだが」

ぴこぴこ、長い耳がゆれる。

「鍛冶屋さん。鍛冶屋さん、いるよ？ ほら、あそこ」

指さす方向を見れば、確かに。隅っこのテーブルに、がっちりした体格のザハールの若者が腰かけていた。鮮やかな赤毛を師匠に倣って長く伸ばし、端をきつちり三つ編みにした男が。

「おー、いたいた。ありがとな」

「どーいたまして！」

ネイネイは時々、音をいくつかすっ飛ばす。どうやら、人間族の言葉は、彼女の口の動きに追いつかないようなのだ。

幸い、赤毛の青年のテーブルには空席があった。それとなく近づき、すんと真向かいの椅子に腰を降ろす。

「んあ？」

揚げパンにかぶりつく動きが途中で止まった。

「あいつかーらず、隅っこの好きな子だねえ」

んぐつと飲み込めだし、お茶でがぶがぶと流し込んでいる。

目を白黒させつつ、どうにか口の中のもの片づけると、赤毛の鍛冶屋は白い歯を見せ、顔が真っ二つに割れそうな勢いで笑みかけってきた。

「よう、ハーツ！」

「よう、グレンデール」

「だーっ、その名前で呼ぶなっつってんだろ？」

途端に口をひん曲げて、不満げに鼻を鳴らす。

「長いし。音、ひねって引っ張る感じがだらーっとして間抜けくさい」

「わかったよ、グレン」

「……ん」

それでいい、とばかりにうなずいている。まったく、こつ言っ所はいくつになっても子どもだ。可愛いやらおかしいやらでつい、顔を合わせるたびに同じやり取りを続けている。

知り合ってこの方6年、飽きもせず。サガルロンドの城壁の、漆黒に輝く『剣の門』。その傍らで出会っただあの日から、ずっと。

【4】赤毛のグレン

夕暮れ迫る門の下、やたらと手足ばかりのひよる長い、痩せた赤毛の少年が一人。布でぐるぐる巻きにした、古ぼけた剣一本抱えてぼんやり立っていた。

髪の毛はぼうぼう、服はぼろぼろ、靴は刷り切れ穴だらけ。全身くまなく埃にまみれ、ただ両の目ばかりがきらきらと、薄闇の中、燃えていた。

『よう、坊主。こんな所で何やってんだ？』

見るに見かねて声をかければ、返ってきた答えは開口一番

『鍛冶屋はどこだ？』

『……何だ、それ、修理に持ってくるのか』

『ちがう』

緑の瞳でひたと見据えられた。春先の草原を思わせる穏やかな緑だが、奥底には強い意志の光が宿っていた。

『こいつを自分で打ち直したいんだ』

幸い、鍛冶屋のギアルレイは古くからの知り合いだった。

『来いよ。案内する』

念願かなって鍛冶屋の親方に弟子入りしたものの。

なまじ飲み込みが早い上に生来のお人よしが災いし、兄弟子どもに、いいようにこき使われ、いびられて。それでも不平一つ漏らす

でなく、ただただしょんぼりうな垂れる背中を何度も見かけた。

以来、時にどやしつけ、時に励まし、あるいは黙って受け止めて何かと面倒を見るうちに月日は流れ……

あれよあれよと肩幅が広くなり、背丈も目方もずんずん増えて。鼻の周りに散っていたそばかすも消え、いつしか上から声が降ってきて。

おいちゃん、おいちゃんと子犬みたいにじゃれついてきたのも昔の話。

「……元気そうだな」

今じゃしゃっきり背筋を伸ばし、張りのある声で呼びかけてくる。

「そつちこそ生きてたか、ヒゲ親父！」

もはやすっかりタメ口だ。

がっちりした腰に斜めにかけた剣帯には、新品同様に鍛え直された、あの剣が収められている。

二ヶ月前、花の季節アシヤの初め。赤毛の青年は見事に自らの手で剣を打ち直し、独り立ちを認められたばかりだったのだ。

「今日の煮込みは何だ？」

「トマトと豆と、茄子と腸詰め」

「なるほど、だからネイネイが料理できたのか」

「トク」
笛小人族はおしなべて天性の農夫で、素晴らしい料理人だ。

しかし、若干の問題があった。彼らは『大きな生き物』が怖くて料理できないのだ。羊や牛、そして豚。肉になっても怖いものは怖いらしい。

そんな訳でネイネイは、未だに『料理人見習い』のまま。それでも日々努力を重ねた結果、なけなしの勇気を振り絞り、どうにか腸詰めまでは触れるようになったのである。

「美味そうだな」

「うん、美味しいよ」

トウモロコシの揚げパンが山と盛られた木彫りの皿を、ずいと無造作に差し出してきた。浸して食べ、と言っことらしい。

「いや、これお前の分だろ？」

「お前のが来たら一個もらう」

「ちゃっかりしてやがる」

ならばと遠慮せずに丸い揚げパンを手にとり、二つに割る。

ほこほこ湯気の立つ黄色い生地を、赤いスープに浸して口に運んだ。

「ん……いい味出してるね」

「親父くさいぞ？」

「親父だからな」

残る半分を浸し、少しずつ噛みしめる。その間に向こうはぺろりと二つ、平らげていた。大口開けて豪快に。

「ん？」

蜜色の瞳がすがめられる。ベルトに手挟んだ革手袋に、見慣れない焼け焦げがあった。

丈夫でしなやかな手袋は、手を護る防具にもなるが、本来は鍛冶

屋の商売道具だ。焼けた鉄を掴んだり、打つたりする時に、手を怪我しないようにはめるのだ。

「お前さんもつくづくマメな男だね」

「ンあにが？」

「食つか喋るかどつちかにしろ！」

「んぐ……」

トウモロコシの粉で作った揚げパンは、口の中で結構かさばる。慌ててもごもご噛み砕き、ごくりとお茶で流し込んでる。

片づいた頃合いを見計らって言葉を続けた。

「こつちに来てからも、しっかり仕事してるだろ」

「ああ、うん。鍛冶屋のメルリンが膝、傷めちまってさ。外回りだけ引き受けた」

外回りの鍛冶仕事、となれば家畜の蹄鉄打ち、農具の修理、あるいは鍋の錆掛けとか。せいぜい、その程度の小商いが関の山だろう。

「お前ね……」

思わず手を上げ、ひらでもって赤毛頭を張り倒していた。ぺちり、と景気の良い音が響く。

「いて」

「自分が何しにここに来たか、忘れちゃったってか？ 大事な『絆の誓い』の儀式の前だろーが」

「わかってるさ。でもお前待つ間、時間、あまってたから」

なるほど、一理ある。

件の儀式は特に準備が必要って訳じゃない。齋戒沐浴して肉を断て、とか。人里離れて穢れをつつしめ、とか。そんな決まりがある訳でなし。

「だからってよお……一生に一度のアレなのに、お前、そんな小商いをぼちぼちと。しかもよそ様の店の手伝いとか」

「いいんだよ。俺が、そうしたかったんだ」

そう言つて、赤毛の鍛冶屋は目元を和ませた。いい感じに力の抜けた笑顔だった。

「儀式に必要なのは、俺と、こいつだけなんだからさ」

愛おしげに、腰の剣を撫でている。

「つたく、これだから素人は……ほれ」

舌打ちして、懐から小袋を取り出した。自分で用意したものと、託されたもの、合わせて二つ。

「これは？」

「儀式に使う浄めの香草。乾燥させた白セージだ。火い炊く時に一緒に燃やせ」

「あ……ありがとう」

「必ずしも必要って訳じゃないが、場を浄めて損はなかる。それと、こっちはギアルレイから頼まれた」

「師匠から？」

「ああ」

油のついた手を伸ばしかけ、慌ててごしごしと拭っている。ただ

し、服の胸元で。苦笑してハンカチを差し出した。

「……すまん」

「いいから、ほれ、早く開けてみ」

うながされるまま、グレンは慎重な手つきで袋の口を開いた。

【5】赤毛のグレン - 2

しゃり……ん……。

澄んだ音を立てて、磨き抜かれた小さな鉄の輪が二つ、転がり出す。表面に刻まれた、連続する螺旋の輪。うねる波頭にも、伸び広がる鳶にも見えるその模様は、戦人族が好んで使う伝統の紋様……ドヴォルグ・サークルだ。

「指輪？」

「ああ。一つはお前さんの左手に。もう一つは」

ハーツは鍛冶屋が腰に帯びた剣の、柄頭の部分を指し示した。

「その、柄のくぼみに、ってな」

「信じらんねえ。あの人、こんな細かい細工もできたんだなあ」

「お前、それ自分の師匠に言うか！」

「だって、あーんなごっつい腕で、がっしんがっしん鉄の塊叩いてるんだぜ？ まさか、まさか、こんな……」

声が震えている。しきりと瞬きして、二つの輪を手のひらに乗せ、握ったり開いたりを繰り返してる。

なるほど、こいつ、嬉しいんだ。それも、すごく。

「お前さん、どんなに勧めても盾の使い方だけは覚えようとしなかつたって言うじゃねえか」

「両手で振った方が力が出せる。それに、こいつもそれを望んでる。そーゆー造りなってるんだ」

劍の柄を指先でなぞっている。

「そら、刀身の長さに対して、ちょっとだけここんとこが長くなってるだろ？ だけど決して片手で振る時に邪魔にならない。ほんとは微妙な。絶妙な比率なんだ！」

えらい意気込みだ。目を輝かせ、頬をつやつやと紅潮させて身を乗り出している。まったく、この劍の話となるといつもこうだ。

「うんうん。お陰でお前さんの馬鹿力を有効活用できるってな。もう百回は聞いたぞ、その話」

軽く押しとどめ、するりと元の流れに持って行く、その手際も慣れたもの。

「だからよ。少しでも身の護りになるようになって、祈りをこめたそうだ」

「ああ……わかる。触れてるだけで、びしびし伝わってくるよ」

グレンは指輪の一つを手にとると、左手の薬指に潜らせた。鉄の輪はするりと吸い込まれ、まるで昔からそこに在ったかのように根元にぴたりと収まった。

続いて二つ目の幾分小振りな輪を手にとり、柄頭のくぼみに近づければこちらもすうっとはめ込まれ、当たり前のように馴染んで、劍の一部となった。

「見事だな」

「ああ、さすが師匠だ」

「伊達に錬鉄のギアルレイと呼ばれてはおらんって事かね……それ、

で」

ざっとハーツはパンくずを払い落とし、テーブルの上に羊皮紙を広げた。すかさずグレンが手元をのぞきこむ。

「探しといたぜ。儀式を行う場所」

「おう！」

羊皮紙には、二つの川のとアンヘイルダールの村、そして川沿いに南東に延びる小街道。この付近の地図が描かれていた。

「絆の誓いの儀式つてえのは、六柱の聖霊の力源が流れる場所が望ましいんだ。『闇の夜』に『光の月』のもと、『風が流れる』中『土の大地』の上で『火を灯し』、『流れる水』のほとりで行うのが理想だな」

「待て、待て、待てよ。『闇』の力も必要なのか？」

顔をしかめている。無理もない。こいつは元々羊飼いの子で、その後は頭の堅いドヴォルグの師匠に育てられた。ずっと『闇』は忌むべきもの、避けるべきものと教えられているのだ。

「なあグレン。『光』と『闇』は双子だ。対為す存在だ。両方が揃って始めて、力のつり合いがとれるんだぜ？」

「うー……うん……」

「ついでに言えば、闇と屍闇は別のものさね」

「うん、わかってる。それは、わかってるんだが」

納得行かないのだろう。

「屍闇は生きても死んでもいない、ただの虚空だ。厄介なのはそこ

に逃げ込んで、こつち側をじーっと狙ってる奴らだ」

「……うん」

ふーっと深く息を吸うと、赤毛の青年は目を閉じて、大きくうなずいた。

「お前がそう言うのなら、そうなんだろう」

よしよし。少年時代からの条件付けは、まだまだ健在らしい。

「それで、だ。話を戻すぞ、グレン」

「おう、話せ」

とん、と人さし指で地図の一点を指し示す。そこは村の門の外、薄雪川のほとりだった。牧草地を過ぎて、さらに南東に向かって半エルド（およそ2km）下った所。

人の痕跡が消え、未開の大荒野に分け入った場所だった。

「ここまで来ないと、ダメか」

「ああ。できるだけ人里から離れた方がいい」

「で、夜、月の出ている時刻にやれと」

「そうだ。今は下弦の月だから、真夜中過ぎることになるな」

「ふむ」

軽く握った拳を口元に当てている。真夜中にたった一人で荒野のど真ん中。大の大人でも怖じ気づく状況だが……。

「それじゃ、村の門の閉まる前に、外に出ておかないとな」

既にやる気になっている！ 奮える気配もありゃしない。自分の

身は自分で守れる自信があるのか。あるいは儀式のことで頭がいっぱいなのか。多分、その両方だ。

「日暮れ前に村から出て、月の出を待つよ」

「ああ、そうしろ……で、どうよ。剣の名前はもう決めたのか？」

「んー、いくつか候補は考えてみたんだけどな。どれもじっくり来なくって」

かさこそと懐から折り畳んだ紙を取り出した。表面にはびつちりと文字が書き連ねてある。

「ベルザーガ（白鳥）、ギルツア（鍵）、ルオイン・ベギ（獅子の瞳）、アイレン・ヒーガル（風の翼）……うん、それっぽいな」

「だろ？ でも、どれもこれも無難すぎるっーか、いまいち面白みに欠ける」

そこで面白さを狙ってどうするよ。秘かに呆れつつ次の行に目を走らせ、思わず止まった。

「この、マルリオラ（トンボ）ってのは？」

「何となく似てないか。すらーっとまっすぐな所が」

「お前ね……」

再びぺちりと手のひらで張り倒す。今度は正面から、額を。

「つてえな」

「知ってるか？ あんまりアレな名前つけようとするど、剣に嫌がられるらしいぞ？」

うえ、とグレンは咽の奥で妙な声を出し、じっと己の剣に目を注

いだ。

「……そうなのか？」

語りかけた所で、ただの剣。返事など望むべくもない。代わりにうなずいてやった。

「そうだとも。剣ひそつちにも選ぶ権利ってのがあらあな」
「うーむ」

真剣になって剣とにらめっこしてる。生き物相手とは微妙に違うが、声に出さず親しい友と語り合っているかのような空気がそこにあつた。

「ガキの頃からの長い付き合いなんだろう？ いい名前を考えてやんな」

「……うん！」

目元を赤く染めて、照れた笑いをにじませた。

(いい顔してやがる)

つい、頭をなで回してやりたくなつたが、自粛した。こいつはもう、工房の裏でべそかいてた子どもじゃない。

立派な一人前の大人で……背中を預けられる、相棒なんだ。

【6】ネイネイのお願い

ふわん、と美味そうな湯気が鼻をくすぐる。見ると今しも色鮮やかな三角帽子が、えっちらおっちら近づいて来る所だった。

「お、ネイネイ？」

「おまちどう！」

木の盆に乗っているのは、熱々の赤い煮込みと、揚げたてのトウモロコシの揚げパン。ココペリの娘はのびあがり、盆ごととんつとテーブルに載せた。

「今日の煮込み定食、どうぞ！」

「おう、ありがとさん。そら」

丸い揚げパンを一つとって差し出すと、グレンは大口開けてぱくりと食いついてきた。

「あぢ」

「直に食うからだ、阿呆」

「でも、うま」

「グレン、揚げパン大好きだものね」

「うん」

「慌てなくてもおわかりあるよ」

「ん」

口いっぱいほおばって、むっしやむっしややってるグレンをネイネイはにこにこしながら見守っていた。やんちゃな弟を見守る、姉さんみたいな眼差しで。

(そう言やこの娘は、グレンより年上だったっけ)

視線に気付いたのか、ネイネイはこっちを見上げ、くいつとシャツを引つ張ってきた。

笛小人族「レク」は男も女も長く髪を伸ばしている。本来なら引つ張るのはその髪で、彼らにとっては肩を叩くような所作なのだろうが……あいにくとハーツの髪はそこまで長くはない。

「薬草のおじさん、薬草のおじさん！」

「んー、どうした」

「スパイス買いたいの」

ああ、それでわざわざ自分で料理を運んできたのか。得たりとうなずき、足下の籠に手を伸ばした。採取からの帰り道だ。それなりに在庫はある。

「採ってきたばかりの、生のになるけどいいか？」

「いい、いい、かまわないよ！」

「何が要りようなんだい？」

「えーっとね。ターメリックとコリアンダーとクミンがほしい！」

籠を漁る手が止まる、

「……すまん、それ無理」

途端にネイネイは目を見開き、頬に手を当て、この世の終わりみたいな顔をした。

「えーっ」

「採りに行ってたのって、エルルタンタなんだよなあ。北の山ん中」

「ああ、そりゃ無理だ」

んぐつと揚げパンを飲み込み、グレンが口を挟む。

「どれも平地でとれる草だものなあ」

ハーツの店に入り浸っていたおかげで、それなりに薬草の知識があるのだ。

「うー……」

「すまん、また今度な」

「今度じゃダメなの、今必要なの！」

「そんなに切羽つまってんのか。珍しいなあ、お前さんがサルバーネに使うスパイス切らすなんて」

ネイネイはぐつとこみ上げる息を飲み込み、長く垂らしたお下げ髪を引っ張った。

か細い肩が細かく震えている。三つ編みに編んだ髪を引っ張るこの仕草は、ココペリ女性特有のもので……人間で言えば、目に一杯たまった涙を流すまいと、懸命にこらえている状態に当たる。

ハーツは焦った。

（やばいな、女の子泣かしちまう！）

「なあ、ネイネイ。良かったら訳、聞かせくれるか？」

（グレン！）

「このおっさん、薬草の扱いにかけちゃ、プロだからな。何かいい

知恵、思いつくかも知れねーぞ？」

空気も読まずにのほほんと、声かけてやがるよこの天然が！ 黙らせようと口の端を引っつかんだ刹那。

「へ？」

とんがり帽子がふらりと揺れた。ネイネイが、うなずいたのだ。

「あのね……実はね……」

【7】ネイネイのお願い - 2

サルバーネは、野菜をスパイスで煮込んだ長命族エルフィンの伝統料理だ。もっちりとした平たいパンや、炊いた米を浸して食べる。

ネイネイの『恩人』で、村の治療師でもある先生の好物でもあった。エルフィンなのだから当然と言えば当然だ。

『ネイネイの作るサルバーネは素晴らしいね。大荒野に来て食べた中で、一番美味しい。故郷を思い出すよ』

先生のためにサルバーネを作るのは、ネイネイの精一杯の恩返しなのだ。

「うんうん、いい話だねえ」

「いったい、先生からどんな恩を受けたんだ？」

「それは、ナイシヨ」

人さし指を横に振っていたかと思うと、ココペリの娘はまたかくりと肩を落とした。

「……浮き沈み激しいな、おい」

「繊細なんだよ、誰かさんどっかの赤毛と違ってな」

「んだとこら！」

「一昨日ね……雷が、すごかったでしょ？」

ああ、とグレンが膝を打つ。

「ドツシャンガツシャンと、すげえ音してたな。あ、ネイネイもしかして……」

にまっつと口元に白い歯がのぞく。

「雷、怖いのかあ？」

黙ってハーツはグレンのつま先を踏みにじった。

「ぬおお」

「怖かったよな、雷。で、どうしたんだ？」

「どっかーんってなった時に、びっくりして……水のいっぱいに入った鍋をひっくり返しちゃったの」

「ああ……」

「じゅわーってなって、そこら中に飛び散って。スパイスが……」
「駄目になっちまった、と」

ぐっとネイネイはお下げ髪を両手で引っ張った。

「乾かして、使える分は使ってるんだけど、やっぱり味が落ちちゃって」

「なるほどね」

ちらつとハーツは視線を客席に向けた。

窓際の席で、当の治療師がサルバーネを口に運んでいた。いつものように、洗練された優雅な仕草で……だが、あるうことが。米に浸したサルバーネを口に運ぶ途中、ぼろっと一粒、椀に落とす。

「確かにエルフィン先生、ちょっと元気ないみたいだな」

「打たれ弱いしなあ」

無言でグレンの脛を蹴飛ばす。

「つてえええ」

悶絶する赤毛を捨て置き、ハーツはしばし考えた。
考えてから、口を開く。

「なあ、ネイネイ。スパイスってのは要は薬だろ？ 先生の薬草園にも、生えてるんじゃないか」

「だーめっ！ 先生の薬草はお薬に使っただいっじな草なんだから！」

「草は草じゃねーか。そーゆーところはお前、頑固なのな」

「おだまりグレン！」

ぺちつと小さな手のひらが、グレンの額を張り倒す。痛くはないが、気迫は絶大。赤毛の鍛冶屋は素直に口をつぐんだ。

「ココペリは草の気持ちかわかるのよ！ お薬になるために一生懸命伸びてる薬草さん、料理用に足りないからわけてとか、ないの。だめなの。わかった？」

かなりあちこち音がすつ飛ばされているが、言わんとすることは何となく伝わって来る。

「……わかりました」

ネイネイは腕組みして胸をそらし、ふんつと鼻を鳴らした。

「よろしい」

さすがに気の毒になってきた。そろそろ助け船を出すのでしょうか。

「あー、もしもし、ネイネイさんやい」

「何、おじさん？」

「手がないでもないぞ」

「ほんとっ？ 教えて、教えて、どうすればいいのっ」

「野っ原に自生してるのを自分で採ってくるんだ」

「そんなことできるのっ」

「ああ」

さっきの地図をひっくり返すと、ハーツは携帯用のペンとインクを取り出した。スミレ色の瞳が手元に吸い寄せられる。

「いいか、これがクミンで、これがコリアンダーな……今の季節なら、ちょうど花が咲いてるはずだ。白と、黄色の」

「うん、うん」

カリカリと音を立て、手早く草の絵を描いて行く。簡素な線描きではあったが、花や葉の特徴がはっきりと描き現されていた。実際の草を見れば、すぐにそれとわかるだろうし、事実そのために描いている。

「こんなのが生えてる。牧草地の近くを探してみる。あの辺は水はけがいいし、日当たりもいいからな」

「うんっ」

「ターメリックの花は、お前さんの大事な笛みたいに先端がふわっと広がっている。んでもって花びらがいくつも重なっていて、こんな形をして……色は薄いピンクだ」

「おお……」

「まだ今年の分は早いが、運が良けりゃあ去年の冬を越したやつが残ってるだろう。いいか、使うのは根っこの塊だ。シヨウガと同じだな。わかるか？」

「うん、わかる！」

兎を思わせるネイネイの顔が、ぱあっと輝いた。さっきまでお下
げを引っ張っていた両手が、きゅうつと胸の前で組み合わされる。

「ありがとう、薬草のおじさん、ありがとうっ！ ネイネイがんば
るよっ！」

「そうか、そうか、良かったな！」

「うん……良かった……ね」

ハーツはゆるい笑みを浮かべて。グレンは疼く足をさすりつつ、
ちよっぴり引きつった笑顔でうなずいた。

だがこの時点では2人とも、忘れていたのだ。

ココペリの『やる気』は、時としてザハールの常識を軽く凌駕す
ると言うことを。

【8】蹄の門より野に向かい

カーン……カーン……。

船着き場の鐘が鳴り、次いで集合の広場、北の見張り塔、そして南の見張り塔。

村の要所要所に設置された、四つの鐘が鳴り響く。一つ一つ微妙に高さと音色が異なり、合わさるとまるで……。

「歌ってるみたいだな」

「ああ」

日の入りを知らせる、夜1の鐘を聞きながら、ハーツとグレンは村を出た。

沈む夕陽に赤々と、体の右側が染まる。一方で左側には青い薄闇がまとい付き、足下から長く影が伸びる。

背後で、ぎ、ぎい……ときしみながら村の門が閉ざされた。

丸太を組み合わせた頑丈な門の高さは、優に大人の背丈の二倍。重さに至っては、大の男が4人がかりでようやく動かせるほど。

朝、一番に門を潜るのは、南の牧草地に向かう牛の群れ。日暮れ時に最後に門を潜るのは、放牧から戻る牛の群れ。故にこの門は『蹄の門』と呼ばれていた。

がしん、と足下からかすかな振動が伝わってくる。門が完全に閉ざされ、頑丈な環貫がかけられたのだ。

アンヘイルダールは水の壁と木の壁に守られている。

すなわち、村をぐるりと囲む二つの川と、土塁の上に丸太の木柵を埋め込んだ防護壁。

唯一の陸の出入り口である『蹄の門』は、日の入りとともに閉ざ

され、翌日の日の出まで開くことはない。

「さて、どうする」

「んー、そうだな、まずは……飯にしようか」

聞く前から答えはわかっていた。ハーツの担ぐ背負い袋には、フライパンと。ポットと。どっしり目の詰まった大きなパンと、チーズが一塊。そして特大の腸詰めが二本、きっちり収められていた。村を出る前に買っておいたのだ。

アンヘイルダールは牧畜の村だ。肉もチーズも新鮮で、他所の街よりずっと安価に手に入る。

村の南には、豊かな牧草地が広がっていた。春先から秋にかけて、ここでは村中の牛が放牧される。

放牧中は、牛を預ける家の者が当番で牛を見張る。

そのため、牧草地には牛飼いが休むための簡素な小屋があった。屋根と壁と扉はあるが床は土間、鍵もない。中には簡素ながら炉が切られ、火が炊けるようになっていた。

日没前に村に入れなかった旅人が、一夜の宿をとることも黙認されている。

「ごめんよつと」

「邪魔するぞ」

誰もいないのはわかっていたが、むしろ小屋そのものに挨拶する気分で一声かけて、中に入る。

小屋の片隅には、たつぷりとたきぎが積み上げてあった。今は夏、遠雷月の半ばを過ぎたとは言え、日中はまだ暑い。煮炊きをする以外は、火を炊く必要もないのだろう。

風の出入りを考えながらたきぎを組み合わせると、グレンは火口

箱から火打ち石を取り出し、慣れた手つきで火を着けた。

「さすが鍛冶屋だ、手際がいいね」

「火がなきゃ、商売あがったりだからな」

「ったく。いっぱしの口きくようになったじゃねえか」

「師匠の受け売りだけどな」

軽口を交わしつつ、ハーツはフライパンを火に掲げるのだった。

分厚く切ったパンに、削いだチーズを乗せて軽くあぶる。さらに炒めた腸詰めを乗せ、仕上げにパンをもう一枚。ポリウムたつぷりのドヴォルグ風サンドを二つ、手際よく作り上げる。

『風』と着くのは、本来ならぎっしり挟むはずの野菜を省略したからだ。

「そら、できたぞ」

「ありがとう」

大口開けてかぶりつく赤毛の青年を、ヒゲの薬草師は目を細めて見守った。

「んあ？ 何見てんだよ」

「いやあ、相変わらず、いい食いつぶりだと思ってな」

「当然だろ？ 美味しいし、腹減ってるし」

「うん、うん」

大事な儀式の直前だ。緊張で、ろくすっぽ食事も咽を通らないんじゃないかと心配したが……取り越し苦労だったようだ。

金属のカップに、ポットからお茶を注いで差し出した。

少しばかりいびつでごつごつしているが、やたらと丈夫なマグカップ。

鍛冶屋に弟子入りして最初の年にグレンが作った『作品』だ。髪の毛の先つちよをチリチリに焦げさせて、それでもうれしそうに両手で掲げて持ってきた。

『おいちゃん、これ！ 俺が作った。やっと水漏れしないのができたんだぜ！』

「……………何、にやけてやがる」
「いや、べつに」

さらりと流して、自分の分を口に運ぶ。さすがに食欲は若者には及ばず、こちらはパンの厚みもチーズの量もいささか控えめ。

あぐり、と噛みつくくと、口の中にしつかりした小麦の味と。とろけた乳のにおい、肉の脂がぷちりと広がる。

舌の上に弾ける肉の香は、小屋に染みついた家畜の残り香と同じだった。

「食つってのは、な」
「うん？」
「命を『いただく』ことなんだな」
「……………ああ」

さらりと言った。かと思えば、もう何事もなかったように次の一口をほお張っている。

(さすが牧夫の息子だな)

【9】蹄の門より野に向かい - 2

しばらくの間、2人はひたすら食うことに没頭した。

やがてさしもの巨大なパンも胃の腑へ姿を消し。ハーツはごそつと懐をまさぐり、小さな布袋を取り出した。紐を緩めて口を開け、中味をころりと手のひらに取る。ふわん、と甘いにおいが漂った。

「何だ、それ」

「んー、アنزズの砂糖漬け」

砂糖と酒で煮込み、乾燥させた濃いオレンジの果実は、『大鍋亭』を出る時ネイネイが持たせてくれたものだった。二つのうち一つを口に放り込み、残りをグレンに向かって掲げて見せる。

「食うか？」

「遠慮しとく」

「そうか」

二つ目も放り込み、まとめてもごもごことほお張った。ぷっくり膨らむ頬を横目で眺め、グレンが『へっ』と鼻で笑った。

「よつくもまあ、そんな甘ったるいもんバクバク食えるよな、飽きもせずー！」

「甘いモン食うと、疲れがとれるんだぞ？ 頭も冴えるし」

追加でもう二つ、口に入れる。効能以前にこの男、筋金入りの甘党なのだ。

「けっ、中年はこれだから」

「そーとも限らんぞ？ どーぞの赤毛さんも、ついこの間までは目
―輝かせて……」

「だああっ、やめ、やめ、ガキん時の話だろーがっ」

耳まで赤くなつて言い返す若者に、そばかすだらけの少年の面影
が重なる。

懐かしいやらおかしいやらで、つい、くっくつと声をたてて笑っ
ていると。グレンがざつと膝の上のパンくずを払い落として立ち上
った。

「もう行くのか？」

「うん」

「まだ、月の出には早いんじゃないか？」

「わかってる。でも、何っーか、腹ん中がつつずつつして、じつとし
てらんないんだ！」

よほど待ち遠しいのだろう。頬を紅潮させ、鼻の穴を広げて、は
つぶはつぶ、と息を荒くしている。前髪が舞い上がるほどの勢いで。
えらい意気込みだ。ついつい苦笑を誘われるが、緊張しすぎて落
ち込むよりは、よほどいい。

「わーっ たよ。行ってこい」

「うんー！」

広い背中を、どんと手のひらで叩いた。

「気をつけてな」

「そっちもな」

「今度会う時は、『剣に誓いし者』だな」

グレンは何も言わなかった。ただ小屋の出口で振り返り、にっと白い歯を見せて笑って……行ってしまった。振り向きもせず、まっすぐに、大股で。

手を振って送り出す。さあ、こっちは番小屋で夜明かしだ。飯も食ったし、後はそれこそ、寝るぐらいしかやる事はないんだが……。

手を伸ばし、熾火になりかけた火をかき起こす。小屋を照らすオレンジの光が、ぼわっと濃く、強くなった。

追加のたきぎを投げ込み、ポットに水を足した。茶葉は多めに、煮出しは長く。

濃いめに入れたお茶をカップに注ぎ、ほんの少しブランデーを垂らして啜る。

「やっぱり苦えなあ」

ついつい眉間にしわが寄る。

「蜂蜜入れたがよかったか？」

だが、この苦味こそが重要なのだ。舌に染み、体内に行き渡り、内側から意識を奮い立たせる。しゃきつと背が伸び、目が冴えた。誓いの儀式は、剣と人の一対一で行うのが定めだ。寄り添うことはできないが……

「せめて一緒に起きてやるよ、グレン」

【10】剣よ、剣

月の出にはまだ、間があつた。

夜の闇は深く、星明かりはあまりに淡い。左手に掲げたカンテラの、オレンジ色の灯火だけが頼りだ。

川沿いに南東に下る道は、大荒野街道に対して『小街道』と呼ばれてきた。

村が拓かれた時に作られて、以来、40年にわたり人や馬車が行き交い踏み固めた道だ。むき出しの地面は日が照れば土ぼこりが舞い、雨が降れば水が溜まり、泥々にぬかるむ。

茫々と好き勝手にのびまくった草木の向こうから、響く水音は薄雪川の流れる音だ。雪姫川よりこころもちゆつくりと、深い水音を右側に聞きながら歩くこと約半時。

「……そろそろかな」

左側に広がっていた牧草地は既に終わっていた。村のざわめきも、明かりも、においさえも、今は遠い。

グレンは方向を転じ、西へ……街道を外れ、草むらの中へと進んで行つた。

丈夫な革手袋をはめた手で無造作に、びっしり生えた堅い草をかき分けた。葉っぱの尖つたの、丸いの、房になつたの。蔓を巻いたの、とげとげの種をびっしり付けたの。長いのも短いのも一緒くた、種々雑多に入り交じり、手に、足にまとわりつき、時折びしつと顔に当たる。

黙々と進むうち、吹き抜ける風が次第に湿り気を帯び、ひやりと頬にまとわりついてきた。

水が、近い。

感じた刹那、目の前が開けた。

足下の土には砂が混じり、踏み出した靴底がざらりと沈む。カンテラを掲げると、オレンジ色の明かりに切り取られて黒々と、ゆるやかに水がうねっていた。

薄雪川の幅は、広い所で2ヌット（210m）にも達する。ちつぽけな灯の照らす範囲になど、到底収まり切るものではない。見渡す限りどこまでも続いている……まるで湖だ。

だが感覚を研ぎ澄ませば確かに、流れ、移り行く水の『気配』を感じる事ができた。

「……着いた」

夜の闇を見上げ、風の吹き抜ける土の上、流れ行く水のほとり。

そこは正しく、儀式に相応しい場所だった。

足りないものは後二つ。光る月と、燃える火だ。

グレンは枝や流木、枯れ草を集めてたき火の準備に取り掛かった。風で飛ばされぬようにまず、石を組み、その中に細い枝や枯れ草を敷く。さらに太い木をナイフで削ってけば立たせ、屋根のように立て掛ける。

まだ火は着けない。夏の夜の空気は汗ばむほどに生ぬるく、食事は既にすませた。

カンテラを消す。もう、星明かりで充分だ。

どっかりと腰を降ろし、剣を鞘ごと剣帯から外して両手で抱えた。外套のフードを後ろに落とすと、川面を渡る風がひやあっと耳もとを吹き抜ける。

ほんのりと生臭い、生きた水のおいがした。

夜の暗さと濃密な水の気配が記憶を手繰り、過ぎた時間を呼び覚ます。

まだ十にも満たぬ子ども頃。訪れる人として滅多にない野っ原で、羊を追っていた日々。

大雨の翌日、通りかかった川べりの崖。不意にぬかるんだ足下が崩れ、転がり落ちた。泥まみれになって起き上がると……崩れた斜面から、剣の柄が飛び出していったのだ。

半ば地上に。半ば粘つく赤土に埋まった、古い古い剣。今となつては滅多に見かけない、戦うために作られた武器だ。人を斬り、命を奪うために作られた物だ。

こんな所に埋まっているなんて。誰かの墓標か、あるいは手にしたまま、命果てた持ち主とともに眠っていたのか。いずれにせよ、羊飼いの少年にとってそれは、死の臭いがまとわりつく不吉な鉄の塊だった。

そう、教えられてきた。

だが。

くるりと巻いた赤毛に緑の瞳。そばかす面のグレンディール少年は、泥まみれの剣を恐ろしいとも思わず、手を伸ばして。両手で握り、渾身の力を込めて引つ張った。

同じ年ごろの子に比べ、力が強いとは言え所詮は子ども。最初はびくともしなかった。しかし、あきらめずに何度も動かすうちに徐々にゆるみ……やがて唐突にずりりと引き抜けた。

反動でひっくり返る。空の青さが。日の光の眩しさが、目に染み

た。もそり、と起き上がって手にした剣を見れば、幅広の刃は刃こぼれ一つない。しかし表面は黒ずみ、所々に赤い錆びが浮いていた。

長いこと埋まっていたのだろう。当然の結果だ。しかし何故だかひどく悲しくなった。同時に愛おしさがわき起こり、物言わぬ鉄を胸に引き寄せて……抱きしめた。

冷たい柄に頬を寄せると、はらはらと涙が零れた。

「待つてる。俺が何とかしてやる」

以来、布で包んで革ひもでくくり、背中に背負って持ち歩いた。いつでも、どんな時でも一緒だった。

【11】 剣よ剣 - 2

寄せては返す思い出の、汀をたゆたううちに時は流れて。

見上げれば、輝く砂を一面にまぶしたような藍色の夜空。その東の端にほんのりと、淡い光がのぞいていた。刈り取ったばかりの羊毛そっくりの、白とも黄色ともつかぬやさしげな光。

月の出だ。

かちりつと火打ち石を打ち合わせ、飛んだ火花を火口に移す。

豆粒ほどのちっぽけな火がじりじりと枯れ草に燃え広がり、やがて枝の間で踊り出す。頃合いを見計らって懐から白セージを取り出し、火にくべた。乾いた白い葉は瞬く間に燃え上がり、ねっとり甘く、それでいて吸い込むと鼻の奥にツン、と突き抜ける爽かな香りが漂う。

胸いっぱい吸い込んだ。

永遠の絆を成すために、結ぶ誓いは三つある。

それこそ数え切れぬほど、己の中で繰り返してきた。

『互いの命が果てるまで共にあること』

『決して手放さず、奪われた時は必ず取り戻すこと』

『命を懸けた戦いの際には、必ず共に戦うこと』

剣の柄を撫でる。左手の指輪と、柄に埋め込んだ輪がかちりと触れ合った。

「剣よ、剣。俺とお前はいつも一緒だった」

声に出して語りかける。ともすれば乾く唇を舐めながら、ゆった

りと、自分の言葉で。

「赤土の中からお前を引き抜き、鉄を鍛える技を覚え、この手でお前を打ち直した。

お前を手に、初めて戦った時の昂ぶりはこの胸に刻まれ、決して消えることはない。

剣よ、剣。

闇をまとう夜と光成す月の下。

吹き抜ける風の中、土を踏みしめ、火の傍らに俺たちは居る。

ささやき流れる水のほとりで、今こそ誓おう」

あふれる思いが咽を震わせ、舌の上で弾み、唇からこぼれ出す。遮るもの無く広がる空と、大地の間に在るのは、剣と自分。他には誰もいない。

思えばがいた『こと』の葉が、ゆらめき、集い、『かたち』を結ぼうとしていた。

「俺とお前は、いつも一緒だ。これまでも。これからも。互いの命が果てるまで」

しゃらりと剣を抜いて月光にかざす。

「俺は決してお前を手放さない。もしも奪われても、探し出す。何年かかっても決してあきらめない。必ず、この手に取り戻す」

月の光を映す刀身は、鏡のようになめらかでありながら、どこかしっとり艶めかしく。汗に濡れ、白く輝くしなやかな生き物の体を思わせた。

「剣よ、剣。命を賭けた戦いには、必ずお前を連れてゆく。共に戦

おう。もしも俺が先に斃れたなら、生まれ変わってお前を見つける。
お前と俺の絆は、永遠だ」

その言葉は、ずっと自分の中にあつた。

二つの言葉が結びつき、新たな意味を成す。唇と舌の動きをなぞり、咽を震わせ、息を声に変える。音が集まり、重なり、思い描いた形と一つになった。

「共に進もう、ヒルザルデイ（月の馬）」

何も、起こらなかつた。まばゆい光のきらめきも。妙なる音楽も。轟く雷鳴、降りしきる花びらも。ただ左目の奥から、じんわりと温かいものが滲み出てきただけ。

だが、変わった。

剣が目覚めた。

そう、確かに『起きた』と感じた。

今までもずっと、何度も剣に語りかけてきた。だが、まるで眠っている相手に話しかけているようで。確かにそこにいるのだが、届いているかはわからなかつた。夢うつつにでも聞いてくれればよいと望むしかなかった。

それが、今はどうだ？

しっかりと自分の声を聞いている。音に乗せた思いを受け止めている。伝わっている。

共に、感じている。

胸が震えた。

「おはよう、ヒルザルデイ。やっと、話ができるな！」

【12】ネイネイがんばる

夜明け前。

夜でも昼でも無い、あいまいな時間にネイネイは村を抜け出した。彼女なりに考えたのだ。

スパイスを採りに行きたい。でも、牛は大きくて怖い。昼間に牧草地に行くなんて絶対に無理。夜は怖い、でも、牛はもっと怖いから。

村を守る防護壁は、あくまで敵を中に入れないための物。中から外に出ようと思えば、意外に抜け道が見つかるのだ。四六時中びくびく脅え、逃げ道や隠れ場所を探しているココペリの目から見れば、なおさらに。

「怖くない、怖くない、牛がないから怖くない。夜じゃないから怖くない」

歌うように自分に言い聞かせて壁をくぐり抜け、今はさやさや柔らかな牧草の中。

「ここは牧草地だから怖くない。荒野じゃないから怖くない。明かりがあるから、怖くない」

その言葉通り、お下げ髪をまとめる髪飾りの一つに、ぼわっと小さな明かりが灯っていた。

銀の台座に、革ひものついた髪飾り。中央には形も大きさも空豆ほどの、つやつやした丸い石がはめこまれている。色は真夏の空の青。おばあさんの、そのまたおばあさんから受け継がれてきた、大事なお守り。

だからいつも、明かりを宿らせるのはここ、と決めていた。

「怖くない、怖くない……あー！」

暗がりの中、ぽつかりと。魔法の明かりに切り取られた、白い光の円の中に一群れ、花が咲いていた。

『ネイネイの笛』そっくりに先端がふわっと広がった花びらが、いくつも重なっている。色は夜明けの雲のような薄いピンク色。

「あつた！ ターメリックの花！」

ぴよいつと一足飛びにすっ飛んで、花の周りをくるくる回る。

ひとしきりはしゃいで落ち着くと、ネイネイは背中に背負った笛を手にとった。

唇を当て、そろっと息を吹き込む。

夜明け前の牧草地はとても静かだ。小さな音でもきくと聞こえる。伝わる。

（お願いお願い、ターメリック。教えて教えて、冬を知ってるのは誰？ 大好きな先生に、おいしいサルバーネを作ってあげたいの……。お願いお願い、教えて）

奏でる音が像を結び、草の抱いた記憶と一つになる。

それはわたし、と答えた草は、他の株より幾分丈が高く。花もつけておらず、茎も葉も固かった。

（……ありがとう）

必要なのは根っこ。傷つけずに掘り出さなければ。

冬越しのターメリックの根元に屈みこむと、ネイネイは両手で土を掘り始めた。

夏の牧草地の土は、水を吸って軟らかく、彼女の小さな手でも簡単に掘り返すことができたのだ。

一心不乱にぎしぎしと、巣穴を掘る兔のように掘っていると……。

キイ、キイ、ギチチチ。

風に乗って奇妙な音が聞こえてきた。

尖った耳をぴくりと震わせ、ネイネイは手を止めた。

聞こえる。風や鳥の声、虫の声とは明らかに違う。地を歩く生き物の気配と声がする。

キイイイ、キイ、ギイ、チチチ。

尖った歯をこすり合わせるような、耳障りな鳴き声だった。どっくんっと小さな胸の中で心臓が跳ね上がる。

何だろう、あれは。犬？ 鼠？ それとも、まさか、狼っ？

(どれも怖いっ！)

手足が縮みあがり、膝が震え、歯がかちかちと鳴る。ぎゅっとお下げを引っ張り、奥歯を噛みしめた。

(落ち着いて、ネイネイ。あれは吠えていない。だから、犬じゃないし、狼でもない)

記憶にある中で、一番近いのは……鼠、だろうか。犬ぐらいある鼠。暗い中、荒野をうろつく、鼠。

ぞわあっと背筋を冷たい稲妻が這い登り、肌にあわ粒が浮く。

葉影から恐る恐るのぞいてみる。

そこは、ぼつかりと開けた空き地になっていた。未開の荒野に変わりはないが、地面は比較的固い。空き地の隅に、箱馬車が一台停まっていた。そのすぐそばで、たき火が燃えている。

赤に黄色、オレンジ、青に緑に紫色。塗りたくられた派手な色と飾り付けで、ひと目見てわかった。あれは、旅芸人一座の馬車だ。

「おかげで、お前さんみたいな半端者も、こうしてお役に立てるって寸法だ」

火の前に誰かが座っている。たぶん二人。一人はフード付きの外套を頭からすっぽり被っていた。もう一人は、水色と黄色が互い違いになった模様の服を着て、おそろいの羽根飾りのついたつばの広い帽子を被っている。

「あっ！」

その服装には見覚えがあった。以前、大鍋亭に滞在していた旅芸人だ。

「良かったなあ、ラモンよ……」

まちがいない！

ネイネイは飛び出した。欠片ほどの疑いも、恐れも抱かずに。嬉しいのと、ほっとしたので、じわっと涙がにじむ。

「ラモンさん！ やっぱりラモンさんだ！ どうして急にいなくなっちゃったの？ すごく心配したよ？」

まっしぐらに駆け寄り、飛びついた。だけどラモンは答えない。

しがみついた手が、ぐっしょりと濡れる。

「あれ、どうしたの、ラモンさん？」

【13】ネイネイがんばる - 2

ラモンの服は、ぐっしょりと濡れていた。それだけではない。あちこちに泥やら乾いた土がこびりつき、かびくさい。

「服、泥だらけだよ？ 転んだの？ 川に落ちたの？ 大丈夫？ 怪我してない？」

ゆらあり、とラモンが立ち上がった。目深に被っていた帽子が、落ちる。

たき火の明かりが照らす顔は、確かに顔見知りの旅芸人だった。ネイネイの料理を喜んで食べて、一緒に笛を吹いてくれた人のものであった。

だが……。輝く金髪は見る影もなく色褪せ、抜け落ちて。水色の瞳は白く濁り、虚ろに宙を見つめている。丹精な顔立ちは、かろうじて原形を留めてはいたものの。右半分が腐って崩れ落ち、肉と、歯茎と、黄ばんだ歯がむき出しになっていた。

「あ……ああ……」

よろよろと後ずさる。

どすん、と背中が何かにぶつかった。いや、『誰か』に。

「ようこそ、お嬢さん。私の舞台へ」

振り返るとフードの男が立ちふさがっていた。この声、さっき話してた人だ。

「何とまあ愛らしい。ちっちゃくて。かよわくて。故にあなたは、最高の『素材』になり得る……」

馬車の扉が開き、何か走り出てきた。背中を曲げてがさごと人間とは思えない不規則な素早さで。四つ足で駆けてくる。

キィ、キィ、キチキチキチ……

暗がり目光る。ぼつぼつと、ぼつぼつと。二つ一組になって近づいてくる。

「さあ、選びなさい。あいつらに噛まれるか。それとも、『ラモンさん』に噛まれるか、好きな方を、ね」

男の目が、ぼつと赤く光った。

ふらありとラモン『だった』モノが踏み出す。まるで手足の先に糸をひっかけて、無理やり動かしているような奇妙な動きだった。その瞬間、ネイネイの心は限界を超えた。

「イ……イ……イイイヤアアアア！」

肩を押さえる手を振り払い、無我夢中で走り出す。

(うそ、うそ、こんなうそ。悪い夢だ、お願い、さめてーっ)

「おやおや、追いかけてこが好みとは……」

脱兎のごとく逃げ出したココペリの娘。そのちっぽけな背中が暗がりに消えるまで、フードの男は黙って見送った。

「なかなか楽しませてくれますねえ、お嬢さん」

にんまりと齒をむき出し、一声命じる。

「逃がすな。行け」

ギチチツ！

ざざざつと鼠に似た何か走り出す。その後を、やや遅れて死せる旅芸人が追う。両手をだらりと前に垂らし、ゆらり、ゆらりと不規則に体を揺らして。

一足ごとにぼとぼと、腐った肉と、かび臭い土を落としながら。

「む？」

笛の音を聞いた瞬間、ハーツは知った。

ネイネイがいる。

間違いなく、ここにいると。

(あいつ、何でこんな所に?)

まあ、笛を吹いてるんだから今は無事なんだろうが。夜明け前の牧草地は、あまりに静かで……あの笛を聞きつけた何者かが、呼び寄せられないとも限らない。

「つたく、世話の焼けるお嬢さんだ」

念のため、様子を見に行こうと小屋を出て、いくらも立たないうちに悲鳴が聞こえた。

「ネイネイ！」

予感的中。舌打ちして声のする方角へと走って行く……
どすつと、ちっぽけな体とぶつかつた。とっさに抱き留めるが、
腕の中で暴れる、暴れる。

「イイヤアアアアアッ！」

はい、確保。ほつと安堵の息をつく間も無く、ガサガサと不規則に草が揺れ、何か動くモノの気配が伝わってきた。

「やーっ離して離してーっ」

「うぶつ、ネイネイ。俺だ、俺だよっ」

「イーイイイイヤアアアアアッ」

(駄目だ、完全に取り乱してやがる)

追っ手は確実に近づいている。もはや落ち着かせる暇はなかつた。

「……ごめんよ、ネイネイ」

「ひいっ？」

暴れる娘を荷物さながらに、小脇に抱えて走り出す。乱暴だが、
今はこれが一番早い。

【14】屍鬼追走

「落ち着け、落ち着けっつのネイネイ、こら、暴れるなっ」

「イーーーーーヤアアアアアア！ 怖い、怖い、怖いーっ」

月明かりを頼りに、ハーツは走った。村までは到底無理。だが、番小屋までならどうにか行きつける。と、言うか行きつけなければ確実に、殺される。それ以前に、このままでは追いつかれる。

足を止めるとハーツはポケットをまさぐった。さっき、食べようとしたのをこの辺に突っ込んだはずだ。

(……あつた)

取り出したのはアンスの砂糖漬け。なおも悲鳴をあげようと、かばっと開いた口に放り込む。

「んぐ、むぐぐぐ」

他ならぬ、彼女自身の手で煮たアンスだ。自分でつけた味だ。吐き出さずに素直に嚙んでいる。

(思い出してくれよ、ネイネイ……)

果たして。んぐつと飲み込むと、ネイネイはぱちくりとまばたきして、こっちを見上げてきた。

「あれっ、薬草のおじさん？」

「そうそう、薬草のおじさんですよー。やっとわかってくれたか」

「ふえ……おじさん……」

うるっとスミレ色の瞳に涙が盛り上がる。

「はいはい、泣くのは後にしとこうな。大人なんだろう？ お姉さんなんだろう？」

「……う、うん！」

涙のにおいに誘われたか。ざ、ざざつと草が鳴る。夜明け前のキーンと冷えた空気に、腐った肉のにおいが混じる。

「あ……来る……」

「考えるな。俺の後をついてこい」

「わかった！」

「よし、行くぞ！」

月を見て方角を確かめると、ハーツは走り出した。すぐ後をネイネイがついてくる。

足腰への負担が減り、揺さぶる動きから解放された。おかげでだいぶ楽になった。

ざんつと目の前が開ける。牧草地に入ったのだ！

夜明け前の空を背に、黒く番小屋が見える。あそこまでたどり着けば、生き延びるチャンスはある。

背後の草をがさりとかき分け、何かが鼻面をつきだした。

「んなるっ」

ベルトポーチから投石紐用の石弾スリングを取り出し、投げる。

ぎゃつと悲鳴を挙げてひっくり返ったのは、二本足で歩くドブ鼠そっくりの生き物だった。ただし、大きさはネイネイと同じくらい

だが。

「ぴぎゃっ」

びくつとココペリの娘がすくみあがる。手を握り、引き寄せた。

「振り向くな、ネイネイ！」

「わ、わかった！」

鼠鬼ムスビ……いや、あいつは腐ってる。屍病に感染し、死んだ鼠鬼（そして酷い時には人間が）が変じた、生ける屍。

（鼠屍鬼マウスか！）

びよっくん、と跳ね起きると、鼠屍鬼は空をあおいで金切り声をあげた。

キーギギギギギ、ギチギチ、グギチャアアオオオ！

ほどなく草むらのあちこちから、耳障りな声が返ってきた。

「あー、くそ、うるせえったら」

矢継ぎ早に石を打つ。顔を出した奴を片っ端から狙い撃ち。当たった所で、手投げでは威力もたかが知れてる。だが、わずかながら余裕ができた。

今のうちだ。

「走れっ」

「はいいっ」

牧草地は、荒野に比べてずっと走りやすい。だがそれは、追っ手

にとつても同じこと。

途中で何度か振り向いては礫を打ち、鼠屍鬼どもをけん制しつつ、どうにか番小屋に駆け込んだ。慌ただしく戸を閉める。壁も扉も板きれ一枚、だが、無いよりずっといい。

「ネイネイ、ここから出るな。絶対に出るな。いいな」

「う、うん」

「もうすぐ夜が明ける。お日さまが出たら、あいつらはまともに動けない」

にいつと口をひっぱって、ゆるい笑みを浮かべる。

「それまでは、おいちゃんが守ってやつからよ。心配すんな。な？」

きゅっとお下げ髪を引っ張ると、ネイネイはうなずいた。

「よし、いい子だ」

【15】屍鬼追走 - 2

小屋の外からひしひしと、嫌な気配が伝わってくる。腐った肉とカビた土。がさごそと不規則に動く足音、爪音、金切り声。ちらりと戸のすき間から外を見る。

小屋を中心に、二つ並んだ目が。背中を丸めた影が、半円を描いて近づいてくる。

その手前にもう一つ、ひよろりと背の高い人影があった。まだ遠く、薄れつつある月明かりでは相手が何者なのか見分けることはできないが……いびつな動きが、語っていた。彼の者もまた、動く屍なのだ、と。

東の空がほんのりと白く染まっている。夜明けが近い。だが頼みの太陽は今だ地の下にある。加えて鉛色の雲が分厚く立ちこめ、草地から立ち上る朝もやが、ただでさえ薄い光りを遮っていた。

(あの程度じゃあ、まだビビっちゃくれねえよな……)

「まったく、何であいつら、こんな人里近くに？」

震える声でネイネイが答える。

「馬車……」

「何？」

「怖い人が、馬車で連れてきた」

(そうか！)

ようやく合点が行った

間もなく、日の出の鐘が鳴る。放牧のため、牛飼いと牛の群れがやってくる。それで逃げ出してくれるような、やわな連中ではない。むしろ獲物が増えたとばかりに襲いかかるだろう。

それこそが『怖い人』の。屍闇の使徒の目的なのだ。

生者でありながら、屍闇の王に忠誠を誓う者共。何食わぬ顔で人々の暮らしに紛れ込み、ひっそりと。だが確実に、屍闇の王の再来に備えて蠢く奴ら。

ハーツと赤毛の相棒は、仲間たちと共に何度も彼らの企みを阻止してきた。

不屍どもの中には、かかった者を死に至らしめ、その後不屍に変えてしまうおぞましい病……屍病を広める者がいる。今、自分たちを取り囲む奴らが正にそれだ。

ほんのひと噛みすれば良い。

噛まれた者は、人も動物も屍病にかかる。見た目には、ただの熱病にしか見えない。そして牛がいつ死んで、不屍と化すかは人間よりも、ずっと分かりづらい。

アンヘイルダールの人々は牛を大事にしている。家畜の病を治そうと懸命に看病するうち、牛飼いとその家族は次々と不屍化した牛に噛まれ……そして病が広がる。

(なまじ人だけに感染させるより、よほど効果があるってえ訳だ……)

半円に陣を組んだ鼠屍鬼どもが、じわじわと近づいてくる。夜明

け前の薄明かりに、先頭に立つ人影の顔が浮かんだ。

「何てこつたい。ラモンじゃねえか！」

だが、あれは屍人。魂も記憶もない。わかっけていても、知った顔を見れば手も鈍る。そこまで考え抜いた『人選』だとすれば、黒幕は相当にしたたかで、悪賢い。

人の心の弱点を知り尽くし、冷徹に抉ってくる。

だが、こちらら伊達に年は重ねていないのだ。

「因果なもんだ。まさかこんな形で会うとはなあ」

投石紐に石弾を込める。

肩で扉を押し明け、右半身を突き出した。弓手銃手がいるなら危険、だが今回の相手は飛び道具は使うまい。屍人からはもはや道具を使おうと言う意識すら、失われている。

鼠屍鬼は、生前の記憶を反すうするかのように弓を撃つこともある。だが不幸中の幸い、自分たちを追って来た奴らは四つ足で走っていた。弓を携えている様子はない。持っているなら、とつくに打っているだろう。

「眠らせてやるよ。今度こそ」

ひゅつと紐がしなり、石弾が屍人の額にのめりこむ。腐肉が飛び散り、ぽつりと穴が開いた。だが、まだ動く。軽くなった頭をゆすつて、ゆらゆらと歩調を変えずに。

「くそつ、やっぱ一撃って訳に行かないか。足狙った方が早かったかなあ……」

ラモンの後から、じわじわと鼠屍鬼の群れが迫る。三匹と思えば、さらにその後ろに五匹控えていやがった。

我知らず口元が引きつり、乾いた笑いが漏れた。

「ははっ、さすが鼠だ、うじゃうじゃ増えやがる!」

「おじさんっ」

「ああ、大丈夫だ、ネイネイ。心配すんな!」

肩越しに振り返る。左手の拳を握り、とんと己の右胸を叩いて見せた。

「教えてやるよ。この右胸の真紅の枝は伊達じゃねえってな!」

「えと、えと……うんっ!」

意味は理解できなかったようだが、安心はしてくれたいらしい。上々。再び敵に向き直り、次の石弾を込めた。

我ながら空元氣もいい所だが。

(希望の灯火が希望を無くしたら、洒落にならんだろーが。なあ、グレン?)

【16】真紅の枝、青い馬

じりつと一步、屍人が前に出る。既に額に一つ、胸に一つ大穴が開き、左腕は肘から先が千切れて皮一枚でぶら下がっている状態だ。生きた人間なら激痛に言葉を失い、とつくにうづくまっているだろう。

そう、相手が生きた人間なら。

「なあ、ラモンよ。そろそろ終わりにしようぜ？」

じつとりとわきの下に冷たい汗がにじむ。既に間合いは一足一刀、投石紐で狙うには近過ぎる。確実に次は、手が届く。

手を開いて投石紐を落とし、ベルトから小刀を引き抜いた。酒場の喧嘩では、絶大な威力を誇る武器だ。引き抜いた瞬間、小競り合いが切った張ったの刃傷沙汰に昇格する。

不屍の化け物相手となると、悲しいくらいにささやかな武器ではないが……身を守る役には立つ。

ぼとぼと腐った肉の破片を落しながら、屍人がゆらりと前に出る。水飴の中を泳ぐようなゆるい動きから一転、獲物にかぶりつく獣の素早さで。裂けた顎をくわつと開き、黄ばんだ歯で噛みついてきた！

「くそ、やっぱ、そう来るか！」

さもありません。最大にして最強の攻撃だ。ひと噛みされたらそれでお終い。この場を運良く生き延びたとしても病に侵され、運が悪ければ三日後には不屍の仲間入りだ。

喉元めがけて突進してくる不吉な顎を間一髪、ナイフの刃で受け止める。

金属を噛む耳障りな音が響き、手を、肩を震わせる。

「む……むむ」

組み合ったまま、にらみ合う。どろりと白く濁った眼球には、何の表情も浮かばない。

もう、ラモンはここには『居ない』のだ。

がきがきと妙に規則正しい早さで黄ばんだ歯が軋む。

衝撃が走り、がくつと手首が曲がる。ナイフを支えていた力が四散し、手応えが消失していた。

ナイフの刃が折れた。

いや。

噛み砕かれた！

「ちつくしよお、かってえ歯あしやがってー！」

屍人が襲ってくる。もう、身を守る道具はない。

どうする。

下がるか？

ちらりと視線を横にすべらせ、肩越しに小屋の戸をにらむ。

ダメだ。あり得ない。その選択は、無しだ。

少なくとも自分がここに立ちはだかっている限り、不屍どもはネイネイに近づけない。

太陽が昇り切るまで。分厚い鉛色の雲と、立ちこめるもやを突き抜け光を注ぐその瞬間まで、持ちこたえれば望みはある。

無造作にナイフの欠片を吐き捨て、屍人がガッと口を開ける。上あごと下あごの間には粘つく糸が伸び、腐った舌がひらめいていた。

朽ちた腑からこみあげる腐臭が、むわつと顔に吹きつける。

(やばい、嘔まれる)

(避けられねえ！)

とつさに腕で顔をかばった。

一瞬、鼠屍鬼どもにたかられ、体中かじられる己の姿が脳裏をかすめる。

(生きたまま肉を噛み取られ、内臓をすすられるってのはどんな気分なんだろう?)

耳鳴り響く頭の中、馬鹿みたいに勢いづいて思考が回る。それも縁起でもない方向に。

だが。ここで折れたら、嗤う奴がいる。

底知れぬ虚ろの闇の向こう側で高らかに、嘲り笑う奴らがいる。

ちくしょうめ。

意地でも彼奴等を楽しませてやるもんか。

絶対に。

絶対に！

ぎりりと奥歯を噛む。滴る汗の塩の味が、ぴりぴりひやりと舌を刺す。

不吉な予感も絶望の兆しもいつしよくたに丸めて飲み下し、屍人を睨んだその刹那。

びゅんつと何かが脇をすり抜けた。

吹き抜ける風に混じる白セージの芳香が、淀んだ腐臭を打ち抜く。

(まさか！)

銀光が走り、ずばつと肉を断つ音が響いた。

左手もろとも胴体を両断され、ゆつくりと。虚ろな目と、崩れた顔と。肩と胸とが斜めに傾き、地面に落ちる。残された足はよろ、よろと二歩ばかりたたたらを踏んだが、直に上半身の後を追った。

「ああ……」

ハーツの右胸に、真紅の枝が燃え上がる。身にまとう服の布地をも突き抜けて、赤々と輝いていた。

まるでそれ自体が一本の樹木であるかのように。

地面に深く根を下ろし、天をあといで枝葉を伸ばす。過ぎゆく月日をその身に抱き、重なる輪に包み込み、移り変わる生と死の営みを見つめている……

樹木の抱く歳月に比べれば、人の世の奏でる日々はほんの束の間。なればこそ。

手を差し伸べずに居れようか。たとえこの身が切られ、焼かれるとしても。

曙の薄明かりに浮かぶ、がっしりした影が振り返る。逆光で顔は見えない。だが、赤い髪と輝く瞳が教えてくれた。

いや、それ以前に知っていた。

信じていた。

あいつは必ずやって来る、と。

「グレン！」

視線がかち合った刹那、疾駆する馬を見た。

たてがみをなびかせ、四肢をのびのびと動かし、草原を駆ける。しなやかな首、頑丈な骨組み。若き駿馬の毛並みは紺青色に輝いている。

それは、彼の左目に浮かぶ印と同じ。麦に混じりて凜と咲く、矢車菊の花の青。

分厚い唇の端がくつと上がり、白い歯がのぞいた。

「悪い、待たせたな、ハーティアル」

「つばつかやろう。遅えよ！　つてかその名で呼ぶな！」

こちらも歯を見せ、にやっと笑い返す。

ごく自然に体を捌くと、二人は背を合わせて互いの死角を補い、敵と対峙した。

「背中、任せた」

「ああ、行ってこい」

【17】真紅の枝、青い馬 - 2

投石紐を拾い上げ、再び石弾を込める。ハーツの動きを見届けてから、グレンは猛然と前に跳び出した。

「ここから先は、一歩も通さん。覚悟しろ！」

赤い髪を、たてがみのようになびかせて。

そう、いつ解かれたものか。あるいはここまで駆けてくる間に解けたのか。

普段はきつちり三つ編みに編まれている髪が、完全に解けていた。ドヴォルグ流の宣戦布告、あるいは「憤怒」のサインだ。陽に焼けた太い咽が震え、野太い咆哮をあげる。

「ウーーーーーウウラーーーーアッ」

夜明けの牧草地に朗々と轟く雄叫びは、鼠屍鬼どもの金切り声を完全に打ち消した。

まとうは疾風^{かせ}、奏でる音色は牙と鋼の搗^かち合う響き。

八匹の敵の囲みのただ中で、熟練の舞手さながらにぐるぐると。腕を伸ばし、足を蹴り、八面六臂、疾風怒涛、縦横無尽と斬り結ぶ。

「なるほど、あいつ、今までは動きを抑えてたんだな……」

ハーツは秘かに舌を巻いた。いかに「絆の儀式」を終えた後とは言え、よもやここまで変わるうとは。

あの動き。

腕を目一杯伸ばしてぐるぐる回る、あれは本来なら、短剣を手に斬り結ぶ時のものだ。

武器の軽さ、使い手の身軽さを最大限に生かす戦法だ。それを、あの赤毛と来たら。長剣で楽々やってのけてやる！

元々、グレンの体格や筋力の強さを考えれば、充分可能な動きだった。剣の重さ、長さを支えなければならぬから、控えていただけなのだ。

だが今は違う。彼の手の中にあるのは、ただの鉄の塊ではない。『心魂目覚めし剣』だ。自らの意志で使い手に寄り添い、支える活きた剣。

その違いは、グレン自身も感じていた。自分一人ではここまで動けない。斬れない。あと少しの所で空を切るはずの一撃が、届いている。より深く、切り裂いている。

もう一人、共に居る。

だから、届いた。

一太刀で、二度切りつける。

今、振るったのは剣自身の繰り出した一撃だ。今防いだ一撃は、剣自身が受け止めた。

今までこれほどのびのびと、剣を使うことができただろうか？

「っはあ！」

我知らず、口の端に笑みが浮かぶ。大人の余裕と子どもの一途さが入り交じり、不敵と呼ぶにはあまりにあどけない。

赤毛の鍛冶屋は鎚打つ両手に剣を握り、群がる敵を叩く、斬る、振り飛ばす。

斬られのけぞる鼠屍鬼を、間髪入れず蜜色の、瞳が見据え石弾が、

腐肉も骨も腑も、もろとも撃ち抜き地に散らす。

ほんのわずかなやり取りで、全てが通じていた。

攻撃を集中させる。石で撃たれた奴を斬れ。斬られた奴を撃て。

焦るな、急くな。確実に仕留める。

絶妙の呼吸で戦う二人の希望の灯火ナシヤの前に、鼠屍鬼は一体、また一体と倒れて行く。もう、残りは四体のみ。

だが、一方で一人前線を守るグレンの体は何ヶ所も爪で引き裂かれ、血がにじんでいた。希望の灯火ナシヤは己の体から屍病の穢れを追い出す事ができる。

だが、それも自身の真力エキア・アハール?? 想いをかたちと成し、運命をも揺らす意志の力が続く間のこと。

(やばいな……)

力尽きれば、屍病に侵される。

ぎりつとハーツは奥歯を噛んだ。

その時だ。

昇る太陽の先端が、分厚く垂れ込める雲を切り裂いた。

わずかに赤みを帯びた、きらめく金色の光が一筋。真っ直ぐに牧草地を照らした。

さながら光の槍。

キ、ギギ、ギ……ギヤアアア!

鼠屍鬼どもが、擦れた金切り声を挙げる。不屍にも感情があるのだとしたら、まさしくそれは恐怖に『脅えた』悲鳴だった。

(ありがてえ!)

ハーツの放つ石弾が、ぼつ然と立ちすくむ鼠屍鬼の右腕を打ち砕く。

思った通りだ、あいつら避ける事も忘れてる。

「今だ、グレン！」

「おお！」

ひるんだ所を一刀両断。頭から胴体まで拝み打ちに叩き割る。

不屍は陽の光を恐れ、憎む。一度浴びれば我を忘れ、暗闇を求めて逃げ惑う。

だがここは真つ平らな牧草地。逃げ込む影は、無い。光に照らされ屍鬼どもは、白く濁った両目を手で押さえ、呻きのたうち右往左往。

動きの鈍った所をハーツの打つ石弾に手足を砕かれ、グレンの剣で止めを刺され。

あるいは剣に斬られてよろけたところを、石で頭を撃ち抜かれ、残す所はあと二匹。

破れかぶれになり、突進してきた一匹をグレンが迎え撃つ。宙に飛んだ胴体を、繰り出す剣がざっくりと貫いた。

ずっしり重たい腐った体を地面に落とし、剣を抜くその間。切っ先が下がり、隙が生じる。

その機に乗じて宙に舞う影一つ。

「むっ」

グレンが向き直った時には既に、そいつは目の前にいた。

「何者だ……」

低く唸る若者に答えるかのように、目深に被ったフードの奥で唇がめくれあがり、白い歯がむき出され……目が赤く光った。

一目見るなりネイナイはすくみ上がった」

「あ、あ、あ！」

【18】我薄明に咆哮す

「やれやれ、せつかく苦勞して連れてきたのに。よくもまあ、ざつぐざつくと細かく刻んでくれましたねえ。ええ、忌々しい！」

地面に転がる鼠屍鬼の亡骸を見渡し、フードを被った男は？？そう、体格と声からしてそいつは確かに男だった。それもかなり背の高い？？肩をすくめた。妙に芝居がかった、大げさな仕草で。

「致し方ありません。私自らがお相手するとしましょう」

言葉とは裏腹に何とも楽しげな口調だ。しかしその『楽しさ』は妙に空々しく、生身の顔の上に布に描いた顔をぺたりと貼り付けたかのように薄っぺらい。

喋りながら、男がゆらりと前に踏み出す。

小屋の中から甲高い悲鳴が拳がった。

「イヤアアアア！ 怖い！ 怖い人来た、来たーっ！」

「そっか、貴様が黒幕か！」

くわつと歯を剥き、グレンが吠える。男は右手を胸に当て、鷹揚に頷いた。

「いかにも。此度の一件、全て私めの仕切りにございます」

「てめえ！」

「さて、忌わしき希望の灯火のお方よ、お初にお目にかかります」

めき、べき、ばき……

口上を述べる間に男の骨格が軋み、歪み、伸びあがる。

肩幅が広く。手足は長く。

「そして、これが最後です」

声がよくしれる。

男の顔が鼻を中心にめきめきと、嫌な音を立てながら盛り上がり、伸びる……

皮膚が裂け、肉が膨らむ。足の形が変わり、ぞろりと伸びた爪が靴を突き破る。

一方で耳がぴんと尖り、じりじりと生える毛に覆われる。

体中の、ありとあらゆる場所が、伸びていた。

「ふー……はー、はーっ」

男は。

いや、男だったモノがずたずたに裂けた皮膚を掴み、べりっ引きはがして脱ぎ捨てる。

その下から、剛毛に覆われた獣の体躯が出現した。

「うーーるるるうおおおおおお」

両手を広げ、咽を反らせて吠えた。

赤く光る熾火のような目。長く伸びた鼻面はがっとなり割れ裂け、血を滴らせながら伸びた牙が、ぶつかり合っただがちと鳴る。

手足の爪はさながら磨き上げた20本のナイフ。一度触れば、皮膚も肉も百年経た布のごとくずだぼるに引き裂かれるだろう。

フードの男は二本足で立ったまま、狼と人の入り交じった姿に変身していた。

いや、こつちが本来の姿なのだ。

「何てこつたい」

ハーツは首を横に振り、呻いた。

「ウルフマン人狼鬼が化けてやがったか……」

ぶるりと体を揺すってヒトの体の名残を振り落とし、人狼鬼は空を仰ぎ、長々と吠えた。

「うーるるるおーーーーん」

負けじとグレンも剣を構え、叫ぶ。

「ウーーーラアアアアアア！」

それは敵を威嚇すると言つよりはむしろ、自らを奮い立たせるための雄叫びだった。

人狼族の若者と人狼鬼。技量的に到底つり合う敵ではない。だが、ここで退く訳には行かないのだ。

今の己は友と敵の間に立ちふさがる壁であり、剣なのだから。

(厄介なことになりやがった)

ハーツは舌打ちした。

人狼鬼が正体を現すのは、その場に居合わせた者を一人残らず殺すと決めた時だけだ。

しかもこいつは屍鬼とも違って、日が照つていようとお構いなしに襲ってくる。

状況は明らかに向こうに有利だ。鼠屍鬼はまだ一匹残っている。
一匹居れば、事は成る。

「グレン……あんましこーゆー事は言いたかねえが」
「わーってるって」

間髪入れずに返事が返ってきた。

「さつさとケリ着ける。心配すんな！」
「おう」

生意気言いやがって。

だが、この場ではその『生意気』な物言いにどれほど勇気づけられることが。

がちがちと牙を鳴らしながら、人狼鬼が嗤った。

「その髪をもっと赤く染めてさしあげましょう……あなた自身の血でね！」

二人の希望の灯火は同時に叫んだ。

「やかましい！」

叫ぶなりグレンは地を蹴り、草を飛ばして走り出す。
前へ。

がつつと下向きの弧を描いて切り上げる刃と、振り下ろす人狼鬼の爪が噛み合い、また離れる。

(こいつは、さっきまでの相手とは格が違う！)

グレンは速やかに察して太刀筋を変えた。

手足の長さ、己の腕力を頼みにびゅんびゅんぶんぶん回したところで、こいつの素早さには到底追いつかない。ならば、体力の消費を抑えたが有利。

悔しいが、腕力も向こうの方が上だ。しかもこっちは連戦の後。向こうは初戦。

組み太刀は避けねば。迫り合いになれば、押し負ける。

「ずいぶんと、大人しいじゃありませんか。ええ」

人狼鬼の口元がにいつとつり上がる。純粋な獣ならばそれは、牙を剥き出す威嚇であつたろう。だが彼奴は半ばヒト。それは嘲りの笑いに他ならない。

「もつと踊ってくださいよ。さっきみたいに！ それとも、私がお相手では、ご不満か？」

両手を広げ、無防備に胸をさらけ出している。

挑発するのは、己の方が上と過信しているからだ。ならば、そこにつけ入る隙がある。

幸い、こいつは屍鬼ではない。噛まれようが、引つかかれようが、病に罹^{かか}る心配はない。

(ならば！)

剣の刃を水平に寝かせる。正面で構える体勢から左の肘を引き、

脇腹に付けて小刻みに走った。

切っ先はひたと前に。人狼鬼の懐めがけて。

「そっだ……はは、それでいい！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8543z/>

我は誓う、剣に友に

2012年1月6日12時47分発行